

# 世界革命と大東亞戦争

千坂恭二

昔、『大東亞戦争肯定論』という本があった。いうまでもなく林房雄の著書であり、まだ大東亞戦争（太平洋戦争）を正面から肯定する風潮がない時期に、日本の戦争行為を、伝統左翼や戦後史観がというような侵略戦争やそれに類したものだという見方を却け、日本の民族防衛戦争であると主張したものだ。最近、旧軍でいえば将官クラスの元航空幕僚長の田母神俊雄氏による同種の主張が話題になっているが、林の著書は、それら一連の大東亞戦争肯定論あるいは日本の戦争行為の無罪論の始祖たるべきものともいえるだろう。

ところで、いうまでもないが、私は、林房雄的なあるいは田母神氏的な戦争認識や日本無罪論には批判的だ。理由は、Miaの日記においても少しふれたが、それらは旧来の左翼の手垢のついた侵略戦争論的批判の裏返しにすぎないからである。あるいは、見方によれば日本の戦争にたとえ否定的なものであれ能動的で意志的な要素（侵略という意志）のある侵略戦争観に対して、より怯懦で受動的な要素がなきにしもあらずだからだ。

日本の戦争行為を侵略戦争として批判する左翼も、防衛戦争として擁護する右翼も持っているのは、戦前あるいは近代日本についてのある種の共通した認識だろう。それは右翼も左翼も近代日本を資本主義体制だと見ていることだ。周知のように左翼はそこから帝国主義段階の日本資本主義打倒の革命を主張し、それに対して右翼は反共産主義の立場から

資本主義を防衛しようとした。そこから当事者たちの主観や心情はどうであれ、ソ連のコミンテルンの「手先」としての左翼の現実や、権力のご用聞き的な「犬」としての右翼の現実も帰結したりした。それに対して、「反帝反スタの新左翼」や「民族派の右翼」の登場があるが、しかし、そこで展開された「反スタ」主義も「民族派」主義も、よく見るならば旧態依然とした左翼や右翼とさほど変わりはないのではないだろうか。つまり、「反スタ」主義の現実には「スターリン主義の改革的分派」にすぎず、「民族派」主義は「反共親米主義の変奏」にすぎないということだ。「反スタ」主義が日本の戦争を帝国主義的侵略戦争と認識し、また「民族派」主義が民族防衛戦争だと認識していることはその証拠ともいえるよう。

「反スタ」主義における日本帝国主義認識の陥穽<sup>せい</sup>は、日本資本主義の後発性を時間的なものとしか見れず、その先発資本主義に対する対抗性（批判性）を看過していることだろう。結果として彼らは、戦争を帝国主義同士の戦争と見なすことにより、その戦争認識においては当人たちの意識や意図を越えて、先発帝国主義すなわち帝国主義の本隊の援護射撃をしていることになる。なぜなら喧嘩<sup>けんか</sup>両成敗的な批判は、結果的には現実力学において勝者の擁護にしかならないからだ。他方、「民族派」主義は日本の戦争を消極的な防衛戦争と見ることによって当時の米英のヘゲモニー化にあった世界秩序の承認とそれとの和解を結果的に主

張していることになる。

私は大東亞戦争は、アングロ・サクソンの帝国主義のヘゲモニー下にあつた世界に対する世界革命戦争であると認識している。もつというならば明治以来の近代日本とはその存在そのものが革命国家だったのであり、近代日本の歩みは革命国家の歩みでもあつたといふことである。すると歴史を歴史事実の羅列だと解している人は、近代日本の国家指導の意識や方針を持ち出し、「どこが革命的なのか？」と言ひ出すかもしれない。しかし、これについては「歴史」と「事実」は、それ自体としては別のことなのだと述べておこう。歴史は、ドキュメント的な「歴史的」事実の羅列ではなく、それらのドキュメント的事実を作り出した「力」の何たるかにあり、どのような現実を結果したかにある。

考えてみるべきなのは、近代日本の資本主義とは何だったのかということだ。もう少しいうならば、先発資本主義とは異なる後発資本主義とは何かということだ。これについては日本に限らず、日独伊三国同盟を結んだドイツやイタリアについてもいえよう。日独伊三国同盟とは、当時の日独伊の指導者の意識がどのような都合主義的なものであつたとしても、歴史的には先発資本主義に対する後発資本主義の国際的連帯であり世界戦線だつたといえる。後発資本主義には「後発」なるがゆえの、先発資本主義に対する「ズレ」と「対抗性」を持たざるをえない。もし対抗性が欠落したならば後発資本主義は先発資本主

義の従属国や場合によつては傀儡かいらい国家にならざるをえないだろう。

後発資本主義の対抗性は先発資本主義への批判ともなるが、そのような批判の哲学的古典としてヘーゲルの法哲学をあげることも出来るだろう。ついでに述べておけば、ロシア革命によつて誕生したソ連もまた前資本主義という資本主義にすぎない。ソ連の社会主義とは、資本主義の前段階の状態の資本主義であるということであり、独ソ戦におけるトロツキーの「労働者国家擁護」論の本質がスターリン主義の分派的なものにすぎず、トロツキズムやその影響を受けた反スタ的なマルクス主義が、当事者らの理論や思想、主観はどうであれ結果的に帝国主義の手先とならざるをえない厳然とした現実もそこにある。

話を戻すならば、近代日本の後発資本主義性は、その対抗性においてある種の社会主義的要素を孕むということだ。つまり後発資本主義の資本主義は、その意味で資本主義批判を含むのであり、その批判性こそが後発資本主義の独立性ということである。近代という問題についても同様だろう。後発の近代には近代批判や近代の超克という論議が多い。それは近代のドイツ思想や日本の思想を一瞥ひとくすれば分かるだろうし、日本には「近代の超克」という座談会があり、また思想テーマがある。近代批判や近代超克の論議は活発だが、では近代論はどうなのか。ありていにいえば、後発近代が持つ先発近代に対する「ズレ」や「対抗性」が、「批判」や「超克」の論議となるのであり、それが後発近代の先発近代に対

する従属性ではなく独立性の内容となる。

つまり、日本の資本主義的近代とは、資本主義批判と近代批判において独立的自主性を  
持ち、それが日本の独立性の根幹であり、また先発資本主義と先発的近代の支配する世界  
に対する革命性でもあったといえる。日本は、そのような「批判」を、ヨーロッパにおけ  
る後発者であり、先発近代から「ヨーロッパのフン族（アジア人）」と評されたドイツから  
学んだのだった。日本の近代思想理解は、近代ドイツをヨーロッパあるいは西欧と同質の  
もの、あるいはその一翼と見なしてきたが（たとえばドイツ哲学の決定的な影響下にあつ  
た京都学派においてさえ）、それは根本的な誤りだろう。かつての「近代の超克」論議に  
しろ、戦後の大東亜戦争肯定論にせよ、そこに共通していることは、ドイツの位置づけが  
出来ていないことだろう。ドイツの近代は西欧への対抗性を持ち、「反西欧」性を有し、近  
代批判を孕む近代にはかならなかつた。

大東亜戦争を「アジア太平洋地域戦」とする第二次世界大戦は、このような資本主義批  
判と近代批判を孕んだ日独伊の世界戦争だったのであり（イタリアについては述べられな  
かつたが、国民サンディカリズムを考えればいいと思う）、それはまさに帝国主義（先発  
資本主義）と、それと提携したスターリン主義（前資本主義）による世界秩序を打破する、  
まさに文字通りの「反帝・反スタ」の世界革命戦争だったといえる。その意味で連合国か

ら見るならば日本は無罪ではなく、犯罪的なまでに有罪なのであり、日本は国内法的にいえば、地球の内乱罪の行為者であり、無力な無罪者ではないということだ。繰り返すが、これに対するトロツキー流のあるいは旧来の革命派のマルクス主義者による批判は無効である。なぜなら、それらは「労働者国家擁護」というスターリン主義分派としての現実しか持ち得ず、それ以外は現実的基盤のない文学的空論にすぎないからだ。

もう一つ、日本の革命性は、日本がアジアという有色人種の国家だったことにあるだろう。真珠湾奇襲は、世界を支配するアングロ・サクソンの帝国主義の中心となりつつあったアメリカの軍事基地に対する、被抑圧的なアジアの一員である日本の正面からの正規軍的全面攻撃なのであり、これ以上の世界革命的行為は二〇世紀にはなかっただろう。

付言しておくならば、近代日本に関しては、朝鮮半島や台湾の併合や満州国から中国への侵略を云々し、日本の革命性に疑問を呈する議論があると思うが、それらは革命運動には不可欠な「M作戦」の国家的規模のものといえればいいだろう。

二〇〇九年二月二十八日

『悍』創刊記念JUNK連続トークセッション

東京・ジュンク堂書店池袋本店

二〇〇九年二月二十八日印刷発行

『悍』編集委員会

編集人・前田年昭 [t-mae@inelabo.com](mailto:t-mae@inelabo.com)